

① 会社
② 交わる
③ 弓矢

④ 入門
⑤ 日光

2
1 A ウ
B エ
C ア
2 飛
す
3 ウ

4 ウ
5 本来
る
雲

6 I 2
II 1

3
1 気が
れ
た
2 I に
た
II エ

3 ③ と
⑥ き
4 も
じ
も
じ

5 残念
6 ま
る
入
る

7 1

配 点		
①	各2点×	5＝10点
②～③	各5点×	18＝90点
<計>100点		

1 小学校2年生までに学習した漢字から出題している。①「社」の右側の横ぼうの長さに気をつけよう。「士」でなく「土」である。②「交わる」はたがいに交差すること。③「弓」は三画で書く。「矢」の四画目は二画目の横ぼうの上につき出してはいけない。「失」にならないように気をつけよう。④「入門」はここでは学び始めること。「入」が「人」にならないように気をつけよう。⑤「直射日光」は何にもさえぎられず地面に直接到達する太陽の光。「光」は真ん中の縦ぼうから書き始める。

2

1 A (A)の前には「位置づけがなされていませんでした」とあり、あとでは「正式に位置づけられました」と反対の内容が述べられているので「しかし」がはいる。
B (B)の直後に「見ていて楽しいものです」とあり、(B)の前では「変化がとても早く、あっという間に姿を変えてい」という「見ていて楽しい」理由が述べられているので「そのため」がはいる。
C (C)の前の文には「乾燥している時は」、(C)のある文には「湿っている時は」とあり、比べているので「一方で」がはいる。「しかし」もはいりそうだが、(A)で使うため、いれることはできない。
2 飛行機雲は人間が何をするのでできる雲なのかを聞かれている。本文一行目に「(飛行機雲は)人間が飛行機を飛ばすようになって初めて地球上に現れた」とあった。
3 同じ段落に「上空が乾燥している時は」上空が湿っている時は」とある。飛行機雲の変化によって上空が乾燥しているか湿っているかがわかるのである。

4 「時間とともに広がって、③になります」とあるので、何に変化するのかをさがす。直前の段落に「飛行機由来雲が時間とともにさらに変化して姿を変えることがあります。これを飛行機由来変異雲といいます」とあった。
5 線④の段落の冒頭に「たとえば」とあり、ここから具体例が始まっている。前の段落にある「本来の雲とはちがうくみでできる雲」の具体例として挙げられている。

6 I 「飛行機由来雲が時間とともにさらに変化して姿を変えることがあります」とあった。
II 「工場のえんとつから出る排気など」がつくる雲も、人為起源雲と呼ばれる「人がつくった雲」である。

3

1 線③の段落から、まちゃんが学校でめがねをかけはじめたときのこと書かれている。「話題」にもならず、「だれも注目していない」と思っていたときに、友美ちゃんが「めがねに気がついてくれた」と、線③の二行後にあった。
2 直前に「にあってるよ」とあるので、友美ちゃんが「にあってるよ」といつてくれて「にっこりわらいがこみ上げてきたのだとわかる。Iは、◎の文に合うようにさがそう。④の二行後に「にあっているよといわれた」とあった。IIは「にっこりわらい」に合う気持ちちをえらぼう。
3 ③「おとなしい」は、おだやかで静かなさま。直後の「めだたない」からもイメージしよう。
⑥ まるを描いた線が、めがねをかけたことでのどのように見えるようになったのかイメージしよう。
4 友美ちゃんがめがねに気がついてくれた場面は、①の次の行からの部分にあった。「めがねをかけたんだ。まるで、かわいいね」といつてくれた友美ちゃんに「なんといつていいかわからず、もじもじしてしまいました」とあった。線②の二行後に「ドキドキ」とあるが、その後なにもいわれなかったことに「ホッとした」とあり、「ドキドキ」という気持ちちはここではなくなっている。④にははいらない。
5 「岳くんも」とあるので、ほかの人もまちゃんがめがねをかけていることに対してなにもいつていないところに注目しよう。「だれも注目していないのは残念な気もした」とあった。
6 直前に「こんなにもうまくいくものでしょうか」とあるので、さらに前に注目する。直前の段落に「小石をホイッと投げると、ぴたりと小石はまるの中に入るのでした」「百発百中」とあった。
7 「とくに藤本健志郎には」のつづきにつながる内容を考えて、どこにいれるかを決めよう。「とくに藤本健志郎には」「めがねのことで、なんかいわれるのではないかと思つて、ドキドキしていた」が、藤本健志郎はなにもいわなかったという流れである。